北京的生活(1)

山崎　哲永

1．北京的生活の開始

4月1日の行動を説明すると冗談と勘違いされそうで困惑である．しかし規定だから仕方がない．正確に4月1日に日本を出た私は，時差がマイナス1時間の北京に，飛行時間約3時間半であっという間に着いてしまった．空港では，日本の北大（ほくだい）から留学しているM君が迎えに来てくれていた．北京の北大（ペイダー）では到着時刻にあわせて，北京在住11年になるT君が待機してくれている．大変心強い．タクシーに小一時間乗って北大に着く．高速料金込みで80元程度である．

北大内のホテルにひとまずチェックインし，荷物を運び入れつつつぶやく．

「ああ，とうとう来ちゃったよ，北京に」

「もう住んでいる僕たちはどうなるんですか」

軽口を叩き合える日本人院生がいることに感謝しつつ，北京留研初日を迎えた私は，キャンパス内のホテルで荷解きをしながら日本の空港について考えていた．

「セントレア乗り換えは時期尚早だったかもしれない」

千歳から北京への直行便はない．したがって，どこか本州の空港で北京行きに乗り換えるか，千歳―瀋陽便に乗って，瀋陽桃仙空港で北京首都空港行きに乗り換えるかのどちらかになる．乗換えが楽だという触れ込みのセントレアにしてみたものの，コードシェア便でもいったんチェックアウトして荷物を預け替えることが，当日，千歳空港のカウンターで判明した．

西門が一番豪華。いつも誰かが記念写真を撮っている

機内で事の次第を説明すると，一番前が空いているからと移動させられ，さらに，到着したら地上係員がお供しますとのことだった．これはただならぬ事態らしい．しかも，セントレアで「お供」してくれた全日空の地上係員さんも，再チェックインを全日空カウンターで行うのか，中国国際航空のカウンターで行うのかわからないそうだ．結局，なんとかかんとか乗り換え手続きを無事に済ませ，ほっとしたのもつかの間，お約束のように，中国からの飛行機の到着が遅れた．それに伴って出発も遅れる．すでに携帯メールで別れを惜しんでしまった友達に「まだいるよ」と連絡するのも間抜けな話である．もてあました時間で食した日本最後の昼食は，ロビーに唯一あったスターバックスのサンドイッチとコーヒーであった．後に北京にもスターバックスがたくさんあることを発見，しかも値段は日本とほとんどかわらない．とはいえ，コーヒーと言えば砂糖・ミルク入りのインス

YAMAZAKI Akie　札幌学院大学社会情報学部

タントが主流の北京にあって，レギュラーコーヒー慣れした外国人にとっては貴重な存在ではある．

これから本当に，北京で365日暮らすのだなぁ，と思うと，年に一度なら，こういう経験もいいか，と思えてきた．しかし，何のためのコードシェアなんだろう，という気持ちはいまもってぬぐえずにいる．

2．北京的携帯電話

さて，到着二日目に，生活に必要な諸々を教わるため，直線距離で2キロほどの街に出る．ちなみに，道路も直線なので，本当に直線で2キロである．親切にも上記院生二人が着いてきてくれるので心強い．T君は中文系の博士課程の正規の院生，M君は宋代の哲学を研究するため哲学科に留学中の高級進修生（日本でいう研究生）である．まずはATMの場所を，ということになった．

「言葉と共に生命線ですからね」

とM君．言うことが高尚な雰囲気だ．

「これが小公共（シャオコンゴン）です．これでいいですか」

と言ってT君が示したのは，30人乗りくらいの小型のバスである．一律1元で乗れる．決まったバス停以外でも手を上げると止まってくれて，声をかけると降ろしてくれる便利な乗り物だ．便利ではあるけれども，慣れるまでは車掌に声をかけるタイミングがつかめず，なかなか希望のところで降りられない．これを乗りこなせると，一応，中国に慣れた格好になる．しかしこの日は二人におんぶする形で，ただ着いて行くだけである．

ATMの場所を教わり，ついでに定価より安く買える語学教材店も教わる．そしていよいよ携帯電話である．

「携帯見るのに小一時間はかかりますから，先に昼食にしましょう」

とT君．

「なんで携帯ごときに一時間？」

と思ったのだけれども，先達はあらまほしきものなり，言うとおりにしよう．実際に，食事を先にして正解であった．

T君が，銀行の研修所に入ってゆく．とてもレストランがあるとは思えないような門から，工事中のほこりっぽい地面を玄関に向かい，中の階段を上りきったところに，何とも立派なレストランが現れた．

「Tさん，なんでこんなところ知ってるんですか」

いぶかるM君．T君は以前，だれかと一緒に来たことがあるので知っているそうだ．私はまったく土地勘がない上に，もとより方向音痴なので，「ここはどこ？　私は山崎だが」という状態である．

北京にはなぜか，外見からは味がまったく判断できないようなレストランがけっこうある．北大構内にある薬膳料理屋など，大変美味で人気があるのだが，看板がなければ公衆トイレかと思うようなそっけない建物だ．

とにもかくにも，中国で初めて食べる中華料理だ．文句無くおいしい．そして，嬉しい．写真を撮る．これから365日，一体何枚の写真を撮るのだろうか．デジカメにして良かった．北京に来る1ヶ月前に初めて手にしたのだ．

さて，食事を終えると，携帯屋がずらりと並ぶ通りを見て歩いた．ここは携帯通りか，と思うほどの数である．なるほど，これらを見て歩けば小一時間はかかるだろう．

店先には派手な看板がたくさんあり，手書きのPOPも色とりどりで，最も安いものがいくら，と，どの店にも書いてある．一部メーカー名と機種番号以外はすべて漢字であることを除けば，日本の携帯電話の店とそれほど変わらない印象だ．

一軒に入って，T君が店員に尋ねる．

「看板に書いてある，550元の見せてください」

店員が出してきたのは，小さな画面の下に

キーが並んだだけの，なんだかテレビのリモコンみたいな携帯だ．

「これは丈夫です．落としても壊れません．友達にも勧めてこれにしました」

とＴ君．

「僕も使っています」

と，取り出して見せるM君．

しかし，私には中国の携帯電話に対してある思い入れがあった．中国独特の，小さい携帯電話機が欲しいのだ．2003 年の出張時に度々目にしたのは，首からかわいい携帯電話を下げた女の子や，市場で売られているレース編みや皮素材の，色とりどりの携帯電話ケースであった．どれも，日本の携帯電話では大きすぎて入らない．しかし，この日，店頭で目にした携帯電話は，どれも今の日本の電話機とサイズが変わらなかった．

中国における携帯電話の普及は目覚しく，機種のデザインも日本のものよりずっとおしゃれなものも多い．ときに，デザイン優先で使い勝手は二の次だな，と思わせるものもないではないが，とにかく，今の中国は紛れも無く携帯電話先進国である．2005 年 12 月現在では，キティちゃんの携帯が登場して大人気である．ついでに言えば，キティちゃんは日本より中国で人気があるような印象だ．

「もっと安いのないですか」

Ｔ君が尋ねる．すると店員が一旦，奥に入り，中から真っ赤な箱を持って出てきた．

「やっぱりあるんですね．日本だと訊かないですよね」

と，M君．

あっ！小さい携帯だ！

店員がうやうやしく箱を開けると，真ん中に鎮座ましましているのは，憧れの小さな携帯電話である．

「ええと，これは中国○×通信の製品で，韓国で作ったものですが，中身は△×○社のものと一緒だそうです」

Ｔ君が通訳してくれる．そして一言，付け加える．

憧れの携帯。現行機種はどれももっと大きい

「僕は，勧めません」

訊けば，このタイプの携帯電話機は，電波が弱かったり，壊れやすかったり，何かと性能が劣るので，できれば海外の△×○社にした方がいい，と，さきほどのリモコンのような電話機を示して言う．

「私はどうしてもこれがいい．長年の憧れなのだ」

ううん，勧めませんよ……と言いながらも，Ｔ君が店員に性能を確認，電話番号は 150 件登録できて，GPS 機能も付いているそうだ．思いのほか高性能だ，という顔をするＴ君．

「電話と，ショートメールができればいいですよね．インターネットは要らないですよね」と確認される．なるほど，機種による機能の違いがこれほど多ければ，選ぶまでに一時間ではすまないかも知れない．

「基本的な機能さえあればいいよ」

ところで，このショートメール，中国名を「短信」といい，電話番号でメールのやりとりができる便利な機能で，たいてい，どの電話機にも標準で付いている．後に，中国の携帯電話は受け手も課金されるため，大抵の連絡はショートメールで行われることを発見するのだが，この時点ではまだよくわかっていない．

かくして，看板に書かれた最低値よりまだ安い電話機を，しかも憧れの小さな携帯電話を入手した私は非常に嬉しかった．しかし，

説明書も何もかも中国語か．いつになったら使いこなせるようになるんだろう．

電話機は決まった．店員に三枚複写の伝票を切ってもらい，「収銀台」という場所で支払いをする．戻ってきた2枚の伝票のうち，1枚を渡して商品と交換，1枚を自分で保管する．私が支払いを済ませて戻ると，T君が言う．

「さて，電話番号を買いましょう」

今，何て言った？

ふと見ると，店員が電話番号一覧を数枚出してきて目の前に置いた．電話番号は別に買うのだ．しかも，番号によって値段が違う．中国では，八（バー）の発音が「発（ファー）」（「発財（ファーザイ）」＝リッチになる）の発音に似ているため，8が多く含まれていると値段が高く，300元以上するものもある．一方，四（スー）は「死（スー）」と発音が似ているので，4の入った番号は値段が安く，60～90元程度である．一番安い番号が2つ残っていたので，そのうちの1つに決める．

こちらの携帯電話はプリペイド式と似た仕組みだ．電話番号を買うと，その番号のSIMカードというICチップ入りのカードをくれるので，そのICチップの部分をミシン目からパキパキと折り取って電話機に設置すると，それでもう使うことができる．電話機を変えても，そのSIMカードを入れ替えるだけでいいので番号は変わらない．これは便利だ．しかし，犯罪に使われないのかな，と思っていたら，やはり最近は携帯電話を使った犯罪も多いそうである．こちらにいる間に，日本のいわゆる「振り込め詐欺」のようなメールを何度か目にした．学生たちの中には，テレビで注意を呼びかけているのをたまたま目にして騙されずに済んだと言っていた人も多い．便利なものは危険と隣り合わせらしい．

3．名物たらいまわし

到着が週末だったため，週明けから手続きの嵐が始まった．親切にも北大は，どういう手順で手続をしたら良いかの一覧表をくれて，ひとつ終わるごとに担当者がサインをする，という仕組みになっているのだった．

「僕の時，これ，無かったんですよ．ほんと，大変でした」

「一人で全部やったの？　偉いねぇ」

北京在住11年目のT君は，日本の中文系を出てから北京語言文化大学の2年に編入し，卒業時にトップ10に入っていたため無試験で大学院に入学，修士を出てから北大の博士に入ったというとてつもない秀才である．その彼でも，最初は大変だったのだなぁ，と思うと，多少の勇気がわく．今はさっぱり何がなんだかわからないので，T君が通訳してくれるとおりに，サインをしたり，お金を払ったりと，ロボット状態である．留学生担当の女性職員さんだけは流暢な英語を話すので，その方とだけは交流できた．

さて，受け取った小冊子には，「訪問学者については，ナントカ手帳を参照のこと」とある．必要な手続きや規則などが書いてあるに違いない．そのナントカ手帳をもらわなければ．留学生事務室の，英語のできる事務員さんに訊くと，それは学部にあるという．

学部は，公園のような場所を挟んだ両側にある美しい建物郡のうちのひとつである．並んだ順番から番号で呼ばれ，中文系は五院と呼ばれている．門を入ると，入り口に通じる石畳があり，なんとも荘厳な気分になる．

中文系の玄関窓より前庭を望む

さて，事務室をノックして入ってみる．担当の女性に先の冊子の当該ページを見せて尋ねる．

「この，ナントカ手帳，ください」

「ありません」

「は？」

「ありません．留学生事務室にあるわよ」

「向こうで，こっちにあると言われたのだが」

「ありません」

「先生に聞けばよいのか」

「先生は関係ありません」

ちなみに，ここまでは中国語である．一方，訪問学者に対して，北京大学は中国語の要求をしておらず，指導教官と正常な意思疎通ができればよいとしている．ということは，当然，事務がある程度の英語を解すると期待してよさそうなものだが，これがまるでだめなのだ．

さらに，右に行けば左だという，左に行けば右だという．普段は比較的温厚な私も，慣れない生活とここ数日の疲れも手伝ってか，いよいよもって頭に来た．そしてついに英語でまくし立ててしまった．

「なぜ，ないものがここに書いてあるのだ．ないならどうして校正の時にカットしないのだ」

事務の人が中国語で続ける．

「△×＃○×∋◇～！」

話が複雑になってきた．速度も速い．お手上げである．

そして最後に，小さな声で言った．

「sorry」

私も小さな声で答えた．

「没関係（メイグァンシ＝いいですよ）」

無いものは，無いのだ．無いのだから，それを持っていないからといって不利益を蒙ることも，とがめられることもあるまい．

その晩，この一件を話すと，Ｔ君が言う．

「まあ，洗礼を受けたと思ってください．大きな声では言えませんが，まあ，色々事情があって．それに，大学の規定も，現場の教師まで伝わっていないと思いますし，事務に出した書類も，指導教官の目には触れないでしょう」

研究計画を苦心惨憺して書いた私は，ここへ来て一気に脱力した．あれを先生が見ていない！　そうだ，確かに，事務が受け取った後，すぐに ok が出ていることを考えれば，読んでいる時間はないはずだ．ああ．

徒労．

徒労感．

日本語にこの語があることに何度感謝したか知れない．こういう語があるからこそ，こういう気持ちになったときに，それを吐露できるのだ．もし，徒労という言葉がなかったら，私はこの気持ちに押しつぶされていたに違いない．それほどまでに，徒労感を抱かせられる機会の多い一年ではあった．

４．汗と涙の領収書

「領収書ください」と言う人は，たいてい，「はい」という返事を期待している．いや，あまりに当然の帰結なので，自分が何を期待しているかにさえ気づいていないに違いない．私はそのことに，「はい」以外の返答を聞いた時点で気がついた．

「今日は担当者がいないから，明日」

「あ，そう，明日ね」

その翌日．

「昨日のこれこれの，領収書ください」

「今，担当者いないから，明日」

実はこの日は，上述のＴ君に付いて来てもらっていた．本屋に案内してもらう都合もあったのだが，加えて，一筋縄ではいかない何かを予感してもいたからだ．Ｔ君が店員に言う．

「昨日も明日，今日も明日だったら，いつ来ればもらえるんだ？」

「明日は大丈夫だ」

「何時だ」

「四時半以降ならいつでもいい」

「本当だな」

「おお」

Ｔ君は非常に念入りな確認をして会話を終えた．私はその横で手帳に「明日，四時半以降」と書き込む．

「あれくらい念を押さないとだめなんですよ．もし明日もだめだったらまた言ってください」

翌日は無事に領収書を発行してもらえた．担当者が居れば事は簡単なのだ．ただ，中国の領収書には，個人名まで書かないのが普通なので，初めての店だと，

「なんであんたの名前まで要るの？　中国では工作単位（職場）だけ書けば十分だよ」

と疑問を呈する幾多の担当者に，日本ではそれが必要なのだと何度説明したかわからない．後に，毎度これでは面倒なので，宛名を書いたものを持ち歩き，

「この通りに書いてください，日本ではここまで書かないとだめなんです」

と先回りしてお願いするようになった．到着直後から通い始めた語学学校など，授業料を支払って領収書を頼むと，

「ああ，あなたね～，前も書いたわね～」

とすぐ認識されるようになってしまった．企業派遣の駐在員もけっこう来ている学校なのに，領収書を頼む人は少ないのだろうか．ここでは，うっかりすると額面の決まっている政府発行宝くじつき領収書をくれてしまうのだ．物品名もあて先も発行単位も書かれていないので，これでは学務課に送っても領収書になるまい．

レシートと領収書と保証書は，この国では時々，色々と相互乗り入れがあるようで，今もってよくわからない．電気製品を買うと，領収書にはんこが押してあることがある．読みにくい赤インクを判読すると「三ヶ月以内保証」などと書いていることがある．テープレコーダーを勉強用に買ったときの領収書がこれだったので，日本に送ってしまったらどうなるんだろうと思ったのだが，まあ，３ヶ月で壊れる電気製品というのも聞いたことがないので大丈夫だろう，と，コピーもとらずに領収書の現物を送ってしまった．その後，テープが緩んで音がたるむ度にはらはらしたが，なんとか持ちこたえて今（９ヶ月後の12月）に至っている．聞けば，保証がたった５日間などという電気製品もあるとのこと．これまで見聞きしたところでは，最短５日間，最長１年間であった．

さて，北大地下のスーパーにいる領収書関連のお兄さんとも仲良くなって，仕事がスムーズに進むようになってきたある日，そのお兄さんが言う．

「領収書ね，毎回書くのは面倒だから，月末にレシートまとめて持っておいで」

学院大の事務にメールで問い合わせる．

「購入した日付と，領収書の日付が変わってしまうのですけれど，いいのでしょうか」

物品名と値段さえわかればかまわない，という，事務の寛大なはからいのおかげで，北大地下のスーパーにおける領収書発行は月に一度となった．

「そうだ，どうせ要るものだったらまとめて買っておこう」

こちらも面倒を避けるため，必ず使う事務用品をまとめ買いすることにした．北大ロゴと住所の入った封筒もまとめて買っておけば，領収書を送るときにも便利だろう．これが後に仇になるのだが，この時点では，

「私って，なんて準備が良いんだろう」

と思い込んでいた．しかし，中国四千年はそう甘くないのである．

５．郵便あれこれ

日本から送った本が届いたというので，受け取り人になってくれていたM君と一緒に大学の受け取り場まで取りに行った．箱はかな

小包はご覧の通り

り傷んでいたが，中国郵政のテープで補強してくれてあり，まあ，そこそこに無事に着いたと言えよう．

「これはいいほうです」

とM君．そうか……．今後，覚悟しよう．

「もう２つ，後から着くのでよろしく」

「はい，わかりました」

さて，ある日，ノックの音でドアを開けるとM君であった．

「本が着いたって連絡が来たので，２つなら一人で大丈夫なので持って来ちゃいました」

見よ，この姿を！　よくぞ１冊もなくならずに届いたものだ．テープで補強してはあるものの，箱の１辺はばっかりと口を開け，そこから本が今まさに落ちんとす，という状態ではみ出していた．１冊落ちれば隙間が広がり，次々と出て来るのは必定である．何という綱渡り状態！

「うわー，なんだこれは」

「さすがにこれは，かなりすごいほうです」

中国でもレア物らしい．これからの郵便ライフに一抹の不安を覚えつつ，記念に写真を撮る．

さて，忘れもしない６月２日，大学の郵便局から先月同様，学院大大学院・研究課に，汗と涙で集めた領収書を送ろうとしたときのこと，カウンターに封筒を差し出すと同時に，三方向から声が飛んできた．この封筒ではだめだ，と言っているらしい．

「先月は送れたのに，なぜだめなのだ」

「先月は先月だ．法律が変わったのだ」

一人が後ろの電光カレンダーを指差して

「これを見よ」

と言う．

「６月１日から法律が変わって，ロゴ入り封筒は使えなくなったのだ．今日は６月２日だ」

局員のみなさんは，何も怒っているわけではない．事実を淡々と，はっきり言うので怒っているように感じられるだけなのである．それでもやはり多少の不愉快を覚えつつ，言われたとおりに後ろのカウンターで封筒を買う．一回り大きなのをくれたので，封筒をそのまま入れて，上書きを全部書き直す．ああ，二度手間．この種の二度手間に何度泣かされたかわからない．しかし，郷に入っては郷に従えだ．

かくして，不思議な法律のおかげで，領収書をいちいちもらうのが面倒なため買いだめした封筒が郵送用に使えなくなってしまった．不本意だ．中国通のＴ君に尋ねる．

「この法律にはいったいどういう意味があるんだろう？」

「さー，まあ，中国ですからねぇ」

「すごい理由だ」

「ほかの郵便局だったら出せるんじゃないでしょうか」

「いいのか？　法律守らなくて」

「北大の住所，消してみたらどうですか？」

その後しばらく，北大内の郵便局には行く気がせず，手紙も書く機会がなかったので，封筒の件はしばし忘れていた．

さて，６月分の領収書を出す日が訪れた．すでに私は大学の寮を出て外のマンションを借りていたため，マンションの一角にある小さな郵便局へ行ってみた．念のため，北大ロゴと住所をホワイトで消した封筒で持参．茶封筒を白で消すので見た目は非常に良くない．こんな封筒で目上に手紙を出した日には，日本だったらどうなることか，想像するだけ

で冷や汗が出る．学務の方には申し訳ないと思っている．

マンション区内の郵便局員さんは，笑顔，そうだ，笑顔とともに迎えてくれた．

何かの間違いじゃないのか？

一瞬，ひるむ．良いことが起きているのに素直に喜べないのは，この2，3ヶ月で裏を読む癖が付いてしまったからだろう．

「さあ，何を送るの？」

おじさんが笑顔で尋ねる．

「これを，日本まで．書留で」

「没問題！(メイウェンティ≒ok です，問題ありません)」

なんて愛想が良いんだ．

終始にこやかなおじさんと，やさしいお姉さんの応対で，6月分の領収書は無事日本への旅路についた．同じ郵便局なのに，なんなのだ，この接客態度の違いは．後でわかったのだが，ここの郵便局の態度が良いのは有名で，北京大学からわざわざ来ている留学生もいるとのことだった．

中国で小包を出すときは，基本的に自分で梱包してはいけない．郵便局に送りたいものを持参し，局員さんに梱包してもらう．これは，ご禁制の品がないかを確認するためらしい．受け取るときは，普通郵便は郵便受けに，小包とEMSは家まで届けてくれる．しかし，配達時に留守をした場合が面倒である．

ある日，帰宅するとドアに6×8センチ程度の紙が張られていた．いわく，日本から小包が来たのだが留守だったので局まで取りに来られたし，とのことである．局名の欄を見ると，何も書いていないのだ．

「どこへ行けというのだ」

可能性は3つある．北大近くの中関村郵便局，家から自転車で逆方向に10分弱の学院路郵便局，そして，外国郵便物が必ず通る道である建国門郵便局である．前者二つは配達局で，私の家がどちらに属しているかの問題だ．しかし，送られてきたものの中身に疑義があったり，我々には想像がつかない（最後までわからない）理由があったりする場合，建国門で止められていることもある．ネットで購入した本などは，大抵，配達局に置いておいてくれるのだが，地下鉄を乗り継いで40分はかかる建国門まで取りに行かされた学生の話もよく聞くので，ちょっと当惑する．いや，相当当惑した．どこに取りに行くかくらい書いてくれ！　T君に電話で相談する．

「まずは近いところから行ってみてはどうでしょうか」

やはり足で探すしかないか．果たして，小包は最初に行った最寄の学院路郵便局にあった．その後，EMSは2回留守にすると，上地郵便局というまた別の郵便局まで取りに行かなければならないことが判明，郵便は非常に複雑であった．しかし，押しの強い友人は，EMSで2回留守にしても，電話口でなんとか丸め込んで家まで配達してもらっていたので，このあたりもサービスは均一ではない．

郵便事情を考慮すると，中国の友人から手紙の返事がなかなか来なくても，怒らずに理由を考える余裕が出てくる．色々な理由が考えられるからだ．まずは，郵便局にお客が多くて，よほど時間のある時でなければ返事を出しに行けない可能性がひとつ．出したは良いが紛失されてしまった可能性がひとつ(2000年ハルビン市での目撃情報によれば，ポストから回収した郵便物が大量にこぼれても拾わずに行こうとした局員がいたそうである．目撃したのは江別から行った日本人の日本語語教師で，全部拾い集めて渡したそうだ)．さらに，検閲で没収されている可能性もある．その他にも，簡単には想像のつかない要素がまだまだあり得る．現在，最も確実な連絡手段は電話，次がファクスだ．メールも，日本より「略式」な感じがないようで，初めての目上の方の場合でも，手紙を出したと同時にメールを差し上げれば，その後はメールだけでも失礼にならない．大学教員の場合は

特にそのようだ．どうしても郵便が必要な場合はEMSが確実である．

6．自転車ライフ

中国と言えば自転車だ．これがなかなか一筋縄ではゆかない代物なのだ．時間は前後するが，4月の第2週のことである．

「先生，ひょっとして，まだ自転車，買うかどうか迷ってるんですか」

T君が尋ねる．

北大は広い．東門から西門まで，最短距離を歩いても10分以上はかかるし，西門から道路を渡った向こうも北大の敷地だという．南門から北の果てまでは，どれくらいあるのか見当もつかない．キャンパスの北には湖があって，その向こうにもまだキャンパスがあるというのだから恐れ入る．そしてその湖は，冬には凍ってスケートもできるときた．

「授業が終わってからでも，語学学校，十分間に合いますよ」

フルマラソンで4時間を切る若い運動家のT君だから間に合うのか，本当に常識的に間に合うのかは不明だったが，一本道を2キロ，というところまでは把握していたので，これはもう自転車を買わないわけにはいかないだろうと思い始めていた．

自転車でなければ例のバスだ．手を上げて止まってもらい，降りたいところで声をかけて降ろしてもらう，小公共である．これはまだ，本当に降りたいところで降りられるのかわからない．一般のバスにはまだ恐くて乗れない．自転車は，右折自由の自動車が恐い．前門の虎，後門の狼だ．いや，それほどでもないか．

ごく基本的な必要として，寮から教室までででも徒歩7，8分はかかる．それだけでも，すでに「乗らない」選択肢はないことに気づいていた私は，「いや，その，やっぱり」とあいまいな返事をしている間に，あっという間に北大構内の自転車屋に連れて行かれた．

お世話になった自転車屋

自転車販売および修理の店は，キャンパス内のちょっとした広場の一角にある．中国人学生向け風呂屋を左手に，食堂を右手に見ると，中ほどにクリーニング屋と自転車屋，その奥に小さな商店がいくつか入った店があるようだった．自転車は二列にきれいに並べられている．応対に出た店員はイ・ビョンホンに良く似ていた．後から訊いたらまだ19歳だとのことで二度びっくり．

「盗まれても惜しくない程度のがいいですよ」

とT君．聞けば，自転車の盗難は日本以上らしく，盗難防止に新品をわざわざ汚くして乗ったりもするそうだ．組織的な盗難もあるらしく，北大で盗んだ自転車を清華大で，清華大で盗んだ自転車を北大で売る，などという輩もいるそうである．T君の愛車はペダルが取れて，横棒だけになっているのだけれども，盗難防止にそのままにしているという．かくして150元ほどの新車を選んだ私は，お金を払って，はいおしまい，だと思っていたらそこでは終わらなかった．T君が交渉開始．

「安くなる？」

「いや」

「いいじゃないか．120でどうだ」

「いや，140」

「じゃ，130」

「ううん，よし，130」

値切るのか．なるほど．携帯も値切ってい

たが,学内で買い物するときまで値切るのか．ちなみに，学内の商店といっても，直営なのは北大書店くらいのもので，あとはテナントである．路上の店や小さいところでは値切れるけれども，スーパーでは値切れない．

ところで，北大で売っているごく一般的な自転車には鍵もベルも着いていない．ベルは一般にあまりないそうで，付いていると珍しがられて盗まれるという．ちなみに，日本の北大にいた頃，自転車の多い状態をよく冗談で「天安門状態」などと言ったものだが，今の天安門広場近辺は自動車だらけで，自転車の波は見られない．時代は変化している．

「先生，鍵，買いに行きましょう」

「自転車屋で買わないの？」

「スーパーの方が安いんです」

ここで買えよ，というイ・ビョンホンにT君が「自転車，必ず買うから待っててね」と声をかけ，我々二人は一路スーパーへ．

「自転車屋にあった鍵,これよりずっと細いですよ」

巨大な音叉のつまむ部分を取った様な，U字型の鍵である．見慣れないので差がよくわからない．さらに，ワイヤーの鍵も買う．「まあ，二つあればいいでしょう．このワイヤーで，柵なんかにくくりつけておくんです」とT君．

さて，自転車王国中国で自転車を買った感激から，私は持っていたデジカメで写真を撮った．ついでに自転車屋のお兄さんも撮って，モニタで見せる．デジカメは便利だ．コミュニケーションの道具になる．

「気に入った？」

「気に入った」

「プリントしたらあげるね」

これが相当，嬉しかったらしい．

「これから修理は全部無料にしてあげるから，何かあったら僕に言って」

渡航後間もない,心細い時期の私にとって,これは非常に心強く響いた．帰りにT君が言う．

「僕，北京に11年住んでいて，あんな親切な中国人に会ったことないですよ，あんなニコニコして」

かくて初めての自転車を購入したその三日後，早速故障が出て修理．以後，たびたび故障が起きたり盗まれたりで，連日ここに通うことになる．あまりに度々行くので友達になってしまい，後には実の姉さんと弟のように仲良くなった．何が幸いするかわからないものだ．このイ・ビョンホン，本名も李（中国読みは「リー」，韓国へ行くと「イ」）だった．移動の途中に李のところに寄って，修理してもらいながらおしゃべりするのは，非常に簡単なことが思い通りに行かない日常にあって，心温まるひとときであった．

北京の路上では気を抜けない．

いつ飛び出してくるかわからない人と車と自転車，バイク，ロバ車，三輪自転車，電気自転車，電気三輪自転車，リアカー式自転車その他と路上で共存するのは大変なことだ．信号も，車，歩行者，自転車と三種類に分かれているところは良いが，そうでない場所だと，いつ渡れるのかわからないことも多い．ついに仕組みのわからなかった信号もある．

自転車本体に関しても，盗難対策は必須である．一時乗った中古は台湾製の男性用自転車で非常に重く，また，新車を買っても必ず不具合が起きるので自転車ライフは困難を極めたが，気持ちの上では実は非常に快適だった．初代は上述のごとく，わずか3日で故障が出て，二ヶ月で盗まれてしまったのだけれども，終始自転車に関する困りごとの解決を手伝ってくれた李のおかげで，自転車への印象は悪くない．結局，諸々の理由で一年間に合計4台の自転車を買った．そのうち2台は，マンションの地下に警備が移動しただけだと後に判明，一台は人にゆずり（直後に盗まれたそうだが），一台は中古だったので，途中でブレーキが効かなくなって直しても翌日にまた壊れる有様で，危険なためあきらめた．

ちなみに，二台目の新車を買ったときの会話が忘れられない．

「これ，気に入った．気に入ったけど，きれいすぎて…」

「…盗まれそう？」

「うん」

「僕が汚くするの手伝ってあげようか？」

「……ありがとう．でも，まだ，いいよ」

7．信号の周辺

北京はオリンピックを迎える準備で大忙しである．ひとつは選手の養成だろうけれども，この方面には明るくないので省略する．もうひとつは公衆道徳の向上で，競技観戦時のマナーからバスの乗車降車マナーにいたるまで，テレビや新聞で繰り返し特集が組まれる．ちなみに，今，もっともホットなキーワードは「文明」である．「文明乗車」と言えば，降りる人が先，乗る人が後，バス停にちゃんと並ぶ，といった内容を含んでいる．

そして，オリンピックに欠かせないもうひとつの要素が，インフラの整備である．競技場もさることながら，今，生活に直接影響があるのは地下鉄工事だ．

北大は地下鉄延長線上にあるため，夏あたりから工事が始まった．家に向かう東門の前の信号にようやく慣れたと思ったら，通常の信号が取り払われて，門の前の三叉路の真ん中に縦型の信号灯が付いた．

地下鉄13号線の高架から西を望む。突き当たりが北大東門

これが上から，赤・黄色・青の順で変わるのだ．なるほど，

「青になったからって飛び出しちゃいけないよ」

というわけで，「注意」を促す黄色になるのだな．非常に合理的だ．納得，納得．

さて，この信号にもすっかり慣れたある日，東門を出ていつものように自転車にまたがり信号を待っていると，赤の次が，青になっていた．

「順番を決めてくれ」

路上で信号の変わる順番が急に変わるのだったら，一体，何を信用すればいいのだ．赤の次に，突然，青になったものだから，心の準備もないままもたもたと発進しようとして右折の車の波に巻き込まれ，路上で立ち往生してしまった．前後を自動車がすれすれで右折してゆく．日本に居たら恐怖以外の何者でもないが，こちらでは，その後，あまりに頻繁に経験するので一種の諦観が身についてしまった．路上では，1．急な動きをしない，2．まずい状況に陥ってもじたばたしない(車も人を轢きたくはないのだ)，という二点を忘れないことが肝心である．生きて日本に帰りたいものだ．

ここで中国の交通法規の一部をご紹介しよう．中国の自動車は右側通行だ．一番右には自転車車線，そのほかに，ちょっと広めの道路には大抵，自動車専用車線が片側二車線ほどある．自動車は信号にかかわらずいつでも右折してよいことになっている．したがって，前の自転車用信号が青の時には，右折車に巻き込まれないよう用心しながら要領よく渡らなければならない．歩行者用信号は，自動車信号・自転車信号に少し遅れて青になる．そして，青だ，と思ったらすぐに点滅するので非常に気が焦る．日本でこれほどすぐに点滅したら，あきらめて渡らない人が山ほど出るだろうけれども，中国で日本ほど青信号を長くしたら，反対方向の人たちがいつになって

も渡れないような気がする．歩行者は自動車の間を縫ってどこでも渡るのが当たり前の状態なため，信号には威嚇効果が期待されているのだろう．ただ，もし仮にそうだとしても，威嚇効果が発揮されているようには見えない．

ちなみに，北京の地下鉄は渋滞知らずで非常に便利，そこそこに清潔で，料金も初乗り３元と手軽である．市内の交通でよく使われるのは，文字通り地下を走る１，２号線に加えて，私の住まいの近くまで来ている，地上を走る 13 号線の三本，郊外に延びる別の線もある．これらのうち，市内の線を延長して，北大もその途中に入れようという計画である．2008 年に完成なので，今来ている留学生のほとんどはその恩恵に浴する前に帰国することとなる．

さて，先日，携帯電話に交通管制局からのショートメールが送られてきた．前述の通り，こちらの携帯電話は仕組み上，すべてがプリペイド式といった風なのだけれども，電話番号は当局に把握されている．加入者全員を把握していなければ，私の携帯にまで連絡が来るはずがない．大体の内容は「東三環（環状線）のナントカ橋で汚水の漏水があり，交通規制をしています．車のみなさんは迂回してください．ご協力に感謝します」というものだった．そしてその晩，日本のプロバイダのニュースの見出しが目に飛び込んできた．いわく，

「北京で高速道路が陥没」

写真もある．原因は地下鉄工事の現場に漏水したからだというのだが，地下鉄工事が原因なのかどうかは不明らしい．携帯メールのニュアンスと写真ニュースの印象の違いに驚きつつ，その場にいなくて本当に良かったと思った．幸い，死傷者はなしとのことだったので何よりである．どうか一人も死傷者を出さずにオリンピックを迎えてほしい．

（つづく）